我が人生

釧路市医師会

荒井　義章（あらい　よしあき）

昭和19年に東京都世田谷区に生まれた。当時の世田谷は米軍の爆撃で主要道路の両側は廃墟になっていた。

５キロほど歩き幼稚園に通った。自分が親であれば、とても一人では通わせないだろう。

美空ひばりがデビューしたころだった。小学生も美空ひばりの唄を歌いながら通学した。

世田谷区立小学校卒業後、東京教育大学附属駒場中学校・高等学校に入学し、６年後に高等学校卒業となるが、一歩駅の正面を出ると、駒場駅から学校まで旧農学校の瓦礫の山だったことを思い出す。それはそれで懐かしい思い出である。

その後、井の頭線を挟んで向かい側にある、東大教養学部に進学した。

医学部を望んだが心臓弁膜症で仕事ができない父親に代って家族を養っている母親の強い希望で、薬学部や農芸化学科への進学を選んだ。

最初は、医学部を目指していたが、病身の父に代わり生活を支えていた母親の、大反対にあった。僕の小学校の同級生に開業医の息子がいて、母は遊びに行った折、分厚い医学の専門書がずらりと並んでいるのを見て、我が家は病身の父親を抱えていて、医学書を買う余裕がないという意見だった。医学書は後で買えるからと言っても納得しなかった。数年後に弁膜症の父親が亡くなる。

大学卒業後、大阪にある武田薬品の研究所に勤めた。当時、味の素・武田薬品・協和発酵などの会社では研究室を充実させ、米国テキサス大学を参考に石油から微生物を利用して、タンパク質やアミノ酸を作ろうとしのぎを削っていた。大学の研究室でも、民間会社の研究室でも醗酵学、特に石油を微生物によって醗酵させ、安価なグルタミン酸ソーダ（味の素）やイノシン酸を製造しようとしていたのだ。

大学でも学会報告の多くが、石油醗酵に関するものであった。夢のようなアメリカからの情報だった。今では考えられないような研究だ。

当時、大阪の公団に住み長女が生まれ、親子三人の生活をしていた僕に、降って湧いたような情報が入った。

茨城県・土浦辺りに研究学園都市が建造され、筑波大学ができ、中心を占めるとの事であった。何かの折、大阪府庁舎を訪れた時に、筑波大学の航空写真が貼ってあった。眺めているうちに僕は「企業の研究生活を中断して、医学部に入りたい」という強い思いが湧いてきた。

筑波で小学生の塾でもやりながら医学部（医学専門学群）通学が可能か？　現実は友人の助けも借り、可能だった。

昭和56年筑波大学医学専門学群卒業。東京の国立医療センターで研修が始まった。医学部入学に反対していた義章母は嫁と孫が帰って来たので、大ご機嫌、僕も研修手当をもらって大ご機嫌。その後、東芝林間病院勤務。次いで町立厚岸病院で勤務した。その間高校生になった娘は、東京の自由学園で寮生活だった。

その後、紆余曲折を経て現在に至る。

リラ冷えの季節での別れ

旭川医科大学医師会
旭川医科大学

塩野　寛（しおの　ひろし）

紫や白の花のリラの花が咲き乱れ、あまい香の漂う季節であった。

平成19年６月いっぱいで旭川医科大学理事・副学長の任期終了に伴い、停年９か月前に大学を去ることにした。

平成４年11月、島根医大（現　島根大学医学部）から旭川医大に就任して、教室員は助手と事務官がそれぞれ１人と３人の最小の教室であった。年間30コマの講義と40体の司法解剖とDNA多型の個人識別への応用の研究に明け暮れる毎日であった。平成７年、卒業生の清水惠子（現　法医学教授）が初めての大学院生として入学した。研究の範囲も広げ、当時薬剤部教授　松原和夫と清水は、法医中毒学（犯罪関連毒物の分析と体内分布）の研究を始めた。すなわち司法解剖となった中毒事例に対して、薬毒物分析法の開発・体内分布を検討するとともに、犯罪に関連して用いられる薬物の作用機序の解明を検討し、法医鑑定に応用することである。

研究の幅が広がるにつれ司法解剖も増加し、平成18年は138体と平成５年の３倍以上となり、全道の司法解剖の43％を占めるようになった。２人の医師で分担して解剖するようになって、あまり負担は感じられなかった。

平成15年７月頃であったが、新しく就任された八竹　直学長より、副学長を引き受けていただけないかとの話があった。私には任が重すぎる、法医学教授の引き受ける仕事ではないとして一度は断ったのであるが、どうしてもということで引き受けざるを得なくなった。これに加えて評価、入試改革、講座の統合など大変大きな問題を抱えての出発であった。平成16年４月国立大学の国立法人化により、内部の機構改革、法改正など問題は山積みであった。この法人化に伴い新たな役職に就くことになった。これとは別に、大学評価・学位授与機構より、専門委員として平成14年度及び平成17年度の二度にわたり、他大学の評価にも関わった。

法医学の教授をやめて、理事・副学長専任となったのは平成17年４月であった。その年11月には教え子の清水が教授となり、本学最初の医学科の女性教授となったのは、在任15年間の私の最大の喜びでもあった。

国立法人化した地方の単科の医科大学の生き残りも大変難しく、これからの大学は苦労されていくことと考える。

私が法医に入った頃は、司法解剖も北海道では炭鉱爆発による解剖が年に数回はあったものである。今はいかに医療事故がらみの解剖や高齢社会に伴う独居老人が多いことか。

大学を退職しても、今まで関わった事件の鑑定書が存在するかぎり、裁判との縁は切れることはない。これからも証人として裁判に関わっていくのであろう。